

⑮ 酒見勇次郎さん

【信仰に悩める人々へ】

55頁

(昭和六年一月)二十八日午後四時頃、学校から帰って来られたらお話ししようからと言っていたら、母子は同行五六人と示談に來られた。その時は説教に熱が加わっていたため、後頭が痛くて話す気になれなかったから、後ほどお電話しますからと言つて帰つてもらつた。しかしその後姿を見るにつけても合掌せずにはいられなかった。自分が寢食を忘れて求めていた時、泣くにも泣かれず進むにも進まねず、この苦悩を晴らしてくれる知識はないか、この動かぬ心を導く大徳はないかと悶えていたが、酒見君もあの時の立場に立っているが辛いだろうなあ。しかし今の場合甘いことを言えばご教化に腰を掛け、優しく言えば善知識頼みになるから、水際鮮やかにみ親に逢わしてあげなければならぬ。僅か十八歳になる青年学生が心身共に打込んで、入学以來特待生をつづけてきた成績をも振り捨て落第しようが、廃学しようが今の苦悩を今晴らしていただかねばと 猛火の中を切り抜けている有様は勇ましいと言つてよいだろうか、涙ぐましいと言つてよいだろうか。世の中の求道者が一大事と言いつつ一大事になつてゐるだろうか、一大事とは震災に逢うよりも三度火事で焼け出されるよりも、肉親縁者に別れるよりも、より以上の一大事は永劫浮くか沈むかの境に立つ魂の問題ではないか。午後六時頃たくさんの同行と一緒に來て襖を開けたり閉めたりして能所共に気が散つて仕方がないからすべての方に帰つてもらつて二人になつた。

酒見君信仰は易くないよ。苦抜けすれば唯の唯であるけれども、求め抜くまでは一歩も後すだりしてはならないよ。下関の同行が「先生九十九まで進んだものが一つ足りなかつたら百になれませんか」といわれた時、「その通りです。何時とはなしに今日まで導かれた者が、最後の信樂開發の一念の夜明けがないために撰取不捨の利益に預かることができなさいのです。」

井を掘りて 今一尺で出る水を掘らずに出ずと言ひとぞ憂き

と言ふ歌のように、身動きならぬ境地まで求めてきながら 最後の時に退転してはいけなさいのです。」 下関の同行が「どうし

てもわかりませんからやめましょうか」「やめらるればおやめなさい」木で鼻をこすったような挨拶をしました。知識に振り捨てられた後でなければ真剣にはなれません。浴びされるほど法は聞きながら、如来の勅命に偽りのあるはずはないと信じながら心の底が満足していないのは未だ疑いの根が切れていない証拠です。今の心は見れば見る程、法を聞けば聞く程、燃え立つ心のために狂わされて何物も受付けられない心ではないか。上の心はあわて今求めなければ永劫浮かぶ瀬はないとあせりながら、下の心はびくともしない横着極まる自性があるではないか。その心が久遠劫より流転をつづけ、今また法を聞きながら迷いを重ねて沈淪して行かねばならぬのだ。み仏を拝みながら安心ができないのだから無眼人ではないか、妙法を聞きながら満足ができないのだから無耳人ではないか。地獄と聞いても平気であるから地獄に行くのだ。極楽と聞いても何ともないから無信の機なのだ。そんな心でありながら邪見放逸の上に大恩受けた親までも殺す心の動いているのが五逆の罪人ではないか。求めても求め切らないとすれば何処に他力があるのだ。ただ他力だと教えながら何が易いのだと根機の劣いのは棚に上げて法を誇る姿が誹法罪ではないか。難化と捨てられた三機を一人で荷なつていながら、わかるとかわからんとかいつているだけ未だ自分を買被っている憍慢の親玉なのだ。三世の諸仏が見捨てたと言うのも去年や昨日ではないのだ。今業火に包まれていながら業火とも知り切らず、苦悩を苦悩とも知り切らないで八千遍のご苦勞を無にして三悪の火坑に去りつつあるのだ。何ともない心が遣る瀬ない親心で十劫已来立ち続けてあるのを踏み躪ってこけ込むのではないか。その心が必墮無間なのだ、その心が出離の縁がないのだ、その心が地獄は一定住家ぞかしなのだ、釈迦弥陀諸仏に捨てられた者を私はどうすることもできない。君一人でゆくのです。独生独死、世の中のこととは空言戯言、誠は何物にもない。私は知らない。その時の苦しさはどんなであったろう。生汗をかい泣く涙さえもなくなった姿を見るにつけても、望みの絶えたときの苦しさを思い浮かべて口で叱って心で泣いた。永劫の打止めをするのだもの、心のみ親に逢えるのだもの、本当に捨て切ったところに本当に生かされ切る世界があるのだもの。今優しく言えば言葉に掛る。撫で付ければ腰を掛ける、聞く人が生命がけなら話す方も生命が

けなのだ。不思議の仏教を聞き抜いて若不生者不取正覚と衆生と仏とが同時に生き、往生と正覚とが同時に成る一刹那じやもの、口や言葉にかかるものかい。酒見君、その溜息ついているそのままを赦してくださるお方があったらどうなさる。「お任せします」と泣き崩れた。知恵も学問も理屈も聞いたのも覚えたのも知ったのも、臨終は今と迫った時にはすべたが間に合わず、すべてが渴いてしまったところは往生の望みは絶えて自力のなり心は微塵も役に立たず、不実一杯のありたきを、ただで助けてくださらねば間に合わない、すねたありたけを増さず減さず、共に墮ちてやるぞ。十劫已来立ちつづけたのはなれぬ心に成ってこいとはいわないぞ、成れぬ心を成れぬ心と五劫思案の踏み出しから知って知って知り抜いて成就したのが願行具足、動かぬ心を動かしてこいと誰が言ったか「あ！このままですか」念を押すことは微塵もいらぬ。その痺れ切った心を痺れたままを撰取せずんば正覚取らぬ親であったとは不思議の親であったなあ。開いた口のふさがらない早業を他力不思議の信心というのだ。「あら唯でございまして、このままです」と踊り上って喜んだ。その時酒見君の頭をなでて、聞き難いご法を聞き、信じ難い法を信じさしていただいて本師のみ親を始め釈尊も八千遍の甲斐があつたと喜ばれ、三世の諸仏もどんなにお喜びだろう。君の心一つでみ仏を生かしても殺しもするのだ。あの心機一転した一刹那を信楽開発の一念ともいい、信受本願前念命終ともいうのだ。決して前触れはしてこないけれども、苦に悩む前があれば晴れた後があるだろう。泣いた涙の乾かぬ間に歓喜の涙と変わるのだ。貪瞋煩惱は信の前後に変わりはないけれども、疑い一つは晴れているだろう。心の中を探してご覧。どうもの思いがでてくるか。

### 次の朝の返事

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、本当にありがとうございます。何とお礼を申し上げてよいかわかりません。私が救われた嬉しさですもの、ただ南無阿弥陀仏と合掌するばかりでございまして。不思議でございまして、醜い心を抱いた私が心の底から合掌されましたとは嬉しゅうございまして。びくとも動かぬ心をどうしようかと悶えた私は、ただ一人力と頼む先生が「あなた一

人で行きなさい、それから先は知りません」と冷たく突き離されました時、本当にどうしようかと苦しみました。私としては進みもされず、止まりもされず、退きもされず絶体絶命の苦しい立場ですのと思いました。しかし直ぐ裏から「動かぬ心を動かしてこいと誰が言うたか」と教えられました時、ああこのままでよかった、ただであった、何にもいらなかったと泣き崩れました。こうして大きな智慧と大きな慈悲に計らわれて現在に生かされましたとは嬉しゅうございます、何と恵まれた私でしょう。真宗の家に生まれなかったなら恐ろしい心の私はご法も聞かずに終わつたでしょう、小川様の法供養が営まれなかったなら善知識さまにも逢えなかったでしょう。家に病人がありましたら、私が生計を立てる者でしたら折角のご縁がなかったかも知れません。耳が聞こえなかったらどうしましょう。ああ先生私一人を生かすためにこう迄恵んでくださったかと思えば一切を拜まずにはいられません。ご本願を私一人のためと受け切れないと申しあげたことのある私が、今こそご本願は間違いなく私一人のためであったと信じ切らされたことが不思議でなりません。すべての人さまの念力で私は生かされました。今迄は先生のご本の「入信の道程」を早く出版して貰いたいと願っていた私が、今現に闇が晴れて見ましたらその必要が減りました。先生こそ真の知識でありました、本当にありがとうございます。無上最大のご恩を受けた知識さまを明日はお見送りも叶いませず、誠に相済みませんがどうかお許しください。この上は先生が何時までもご壮健でいらせられ有縁の人々をお導きくださいますよう、幾重にもお願いいたします。本当に先生ありがとうございますございました。

南無阿弥陀仏

さようなら